

ごあいさつ



公益社団法人 日本WHO協会
理事長 関 淳一

皆さま方には気持ちも新たに2015年の新春をお迎えになられたことと思います。

また、昨年は当協会の活動に多大のご協力を賜り、この場を借りて厚くお礼を申し上げます。

昨年2014年度の世界保健デーのテーマは「節足動物が媒介する感染症から身を守ろう」でしたが、日本でもデング熱の国内感染が確認され、特に東京では8月に入り、代々木公園とその周辺で発生したデング熱について、代々木公園で捕獲して蚊からウィルスが検出されたことにより、代々木公園の一時閉鎖の止むなきに至りました。

また、これとは別に、一昨年(2013年)12月に西アフリカのギニアで流行の始まったエボラ出血熱(エボラウィルス症)は国境を越えてリベリアとシエラレオネなどに急速に広がり、患者数増加のスピードの速さと死亡率の高さ、また感染者の出国時の水際作戦の困難さなどから、世界中の国々に対して改めて感染症防御対策について問題提起となりました。

WHOも8月8日に、保健上の緊急事態と判断し、加盟国に対して、対応策についての具体的な指示を出すに至りました。西アフリカのエボラ出血熱のアウトブレイクは、今尚、終息には至っておりませんが、世界各国に大きく広がることは防がれております。

これらの、昨年後半の世界における一連の感染症の状況を見る時、私は1948年にWHOが発足する前に議論されたときの、WHOの原点とも言える、「一国でも保健医療の体制が遅れている国があれば、世界中の国がその影響を受けることになる。」また「今や一国では、自国の国民の健康をまもることはできない」と言う言葉を改めて思い出しております。

昨年9月27日に、日本国際保健医療学会学生部会(jaih-s)の方たちと第4回の共催企画によるフォーラムを開催することができました。タイトルは、「紛争概論×少年兵のメンタルヘルス」～紛争の終わりとは～でした。

今回も、フォーラムのテーマの選定や企画等は全てjaih-sの方たちにお任せしましたが、講師の先生方にも恵まれ、色々と考えさせることの多い、意味深いフォーラムとなりました。そのフォーラムの内容を本号に掲載することができました。講師をお引き受け頂きました、小野圭司先生、小川真吾先生に改めてお礼申し上げます。

また、昨年2月から6カ月間、WHOの西太平洋事務局(WPRO)の結核・ハンセン病対策課でインターンシップを経験された石川渚様にその時の貴重な体験の数々についてのレポートをご寄稿頂きました。石川渚様の今後の活躍を期待いたします。尚、私共の協会のインターンの方々に対する経済的支援事業につきましては、今後、目的をこの事業に限定した寄付金集め等も行い、一層充実させていきたいと思っております。

去る11月末に、今年の世界保健デー(4月7日)のテーマがWHO本部から発表されました。テーマはFoodsafety(仮訳:食の安全)です。現在世界中で食糧供給のグローバル化が進んでおり、極めて時宜に合ったテーマであると思います。

今回、香川大学農学部川村理教授に、急遽お願いし「本当は危ない食品のカビ毒(マイコトキシン)汚染」を御寄稿頂きました。是非、御一読の上、参考にさせていただきたいと思っております。